

## 現代青年の思春期の葛藤に関する考察

——映画『スタンド・バイ・ミー』に触発された大学生の回想文をもとに——

*The emotional turmoil within today's children during puberty*

——An examination based on the recollections of university students touched off by the movie *Stand by Me* ——

木村 美奈子 *Minako Kimura*

(デザイン学部教養部会)

### 1. はじめに

最近の若者像を記した言説をみると、思春期の葛藤を体験しない、もしくは反抗期を体験しない若者が増えている、という主張がある。求人情報誌の大手であるマイナビが2012年に大学生200人を対象に行った調査でも、47%もの学生が、「自分には反抗期はなかった」と答えたと報告している。そうした報告の中では、大人に反抗せず、大人の価値観をそのまま自分のものとし、葛藤を抱えることなく成長していく若者の姿が、ある種の危機感をもって語られることが多い。一方で、「思春期の危機を生きる子どもたち」像として、深刻化するいじめや凶暴な少年犯罪の増加が語られ(尾木, 2006)、少年犯罪に対する厳罰化が世論によって強まり、実際に司法においてもその色合いを強めている。

本論は、そうした二極化する若者像をふまえながら、実際に思春期の葛藤や反抗心を体験した、もしくは体験しなかった大学生に、当時のことを回想させ、そのデータを分析することで、生の若者の姿を描き出すことを目的としている。その方法として、思春期を舞台に展開する映画を鑑賞させた上で、いくつかの質問に答えさせた。こうした手続きを踏むことによって、彼らに時間軸の中で過去からの連続性を実感させつつ、今現在の自分を捉えることを可能にしたと考える。このデータをもとに、彼ら自身がどのように思春期を意味付けているのかを、検討していきたいと考えている。

### 2. 映画『スタンド・バイ・ミー』を見て、自らの思春期を顧みることの意味

本論の元になっている学生の回想は、映画『スタンド・バイ・ミー』を学生らに鑑賞させた後に、記述をさせたものである。このような手法を採用した理由は、①『スタンド・バイ・ミー』は思春期の子どもたちの死体探しの冒険を通して、豊富なエピソードによって親や社会に対する子どもたちの葛藤が描かれていること、②ある種、通過儀礼とも呼べるこの冒険(本田, 1995)によって成長していく主人公らの姿が、大人になった主人公の目を通して描かれていること、があげられる。

①について言えば、学生らに単に思春期を思い出させて、エピソードや心情を書かせるより、具体的な例を提示することによって、より鮮明に思春期の葛藤を思い出させる効果があると考えられる。特に、この映画は思春期の子どもたちの心情を、いくつかのエピソード

ドの中に丹念に描いている。見る者は、自分と登場人物を重ね合わせ、「あの頃」の閉塞感、大人の支配の及ばぬときの高揚感と無力感、幼いがしかし忘れ得ぬ友情の甘酸っぱさを、ひしひしと体感することになる。したがってこの映画は、学生たちの思春期のエピソードを引き出すだけでなく、当時の感情を無理なく蘇らせることができるのではないかと考えた。

②については、『スタンド・バイ・ミー』は大人になった主人公の回想として、主人公本人が思春期の冒険を語ることによって、彼を取り巻く環境、すなわち親子・兄弟関係や友人関係、そして世界がどのように見えていたのかが明確になっている。学生らにもこの主人公と同様に自らの思春期を語らせることによって、彼らを取り巻く家族や友人をどのように捉え、思春期の葛藤をどう乗り越えてきたのかを、今現在の彼らの客観的な解釈をもとに書かせることができたと思われる。

### 3. 『スタンド・バイ・ミー』で描かれていること

#### (1) あらすじ

ここで、簡単ではあるが、『スタンド・バイ・ミー』のあらすじを紹介しておく。

主人公の作家ゴーディは、ある日、「クリス・チャンパー弁護士、刺殺される」という新聞の記事を目にした。クリスとは、少年時代の親友である。その事件をきっかけに、ゴーディの 30 年を一気にさかのぼる少年時代の回想が描かれていく。

物語は、人口 1200 人程度の小さな町、アメリカ、オレゴン州のキャッスルロックで展開する。小学校を卒業し中学校に入学するまでの休暇期間であったゴーディ、クリス、テディ、バーンは、いつも四人で木の上に建てた小屋に集まり、煙草を吸ったりカード遊びに興じるなど大人のまねごとをしながら過ごしていた。四人は家庭環境こそ異なるが、少年時代特有の仲間意識で結ばれていた。そして、彼らはそれぞれ家庭では、家族との間に葛藤を抱えていて、ある種閉塞感の中で生活していた。ゴーディはつい先日、両親の自慢であった兄を不慮の事故で亡くし、兄の喪失から立ち直れない両親の冷たい仕打ちから、死ぬべき者は自分だったのではなかろうかと、胸を痛めていた。クリスはアルコール中毒の父とグレた兄を持ち、家庭環境の悪さから、自分が周囲の人たちから信用されていないという体験を積んでいたため、将来の自分について大きな不安を抱えていた。テディは、ノルマンディ作戦で大活躍したことを誇りにしているが今では精神に病を抱える父親に、複雑な感情を抱いていた。

そんなある日、バーンが兄たち不良グループの会話を盗み聞きし、フラワーという少年が線路を歩いていて電車に轢かれ、その遺体が発見されていないということを知る。そこで四人の少年たちは、遺体を発見すれば町の英雄になれると考え、線路伝いに遺体を探す旅に出かけた。少年たちにとってこの旅は、初めて子どもだけで町を出る大冒険であった。

旅の途中、一夜を山の中で野宿することになり、すでに眠りにについているテディとバー

ンの傍らで、ゴードイとクリスはクリスが家から持ち出した父親のピストルを手に、見張り番をしていた。そのときゴードイは、いつも気丈で兄貴分のようなクリスが将来に対する不安を泣きながら訴えるのを聞き、自分だけでなく彼も、溢れそうな不安や悲しみを抱える一人の少年であることを知った。それによって二人の仲間としての距離はさらに縮まり、お互いの間に強い絆が生まれるのだった。

翌朝、夜明けとともに歩き出した少年たちは、ついにフラワーの遺体を発見する。茂みの中に横たわる少年の無惨な姿に、皆一様に目を見張った後、クリスが気を取り直して遺体を運ぶための算段を皆に指示した。が、そのとき、ゴードイは遺体を見つめたまま、「なぜ死んだんだ」とつぶやき座り込んでしまう。彼の中ではフラワーの死と兄の死とが重なり、「なぜ兄は死んだのか」、「自分が死ねばよかった」、「父もそれを望んでいた」という少年にとっては抱えきれないほどの思いが一気に吹き出した。クリスはそんなゴードイの肩を抱き、「父親はお前のことを知らないだけだ、きっとお前はすごい作家になれる」と励ますのだった。そんな場面が、遺体を横取りしようとする不良グループの年長者たちの出現によって、一気に緊迫度を増した。クリスは果敢に立ち向かい、ゴードイは銃をリーダー格の青年に突きつけた。その気迫に押されて、年長者たちは遺体をあきらめ退散してゆく。

結局、少年たちは英雄になるという当初の目的を果たすことなく、匿名で警察に通報することにし、その場を後にした。少年たちの冒険は終わった。町に戻っていった彼らにとって、町はそれまでよりも小さく、違って見えた。

その後、進学組と就職組に分かれて成長していった四人は、あの冒険以来ほとんど集うことはなかった。映画の中では大人になった彼らの「今」が語られ、中でもクリスは苦学して弁護士になり、冒頭の事件に巻き込まれて死ぬまでのいきさつが示される。ゴードイはクリスの予言どおり、作家となり、かつての冒険を小説に書き綴った。その文の中には、「私はあの12歳のときに持った友人に勝る友人を持ったことがない」と記されていた。

## (2) 大人になるための通過儀礼

『スタンド・バイ・ミー』におけるこの冒険旅行は、少年時代の友人、そして少年時代そのものへの、まさに決別の儀式のように描かれている。本田（1995）はこうした少年と大人とははっきりと切り分ける決別の儀式、すなわち「通過儀礼」について以下のように述べている。

少年の日の終わりに「死と再生」を体験する関門が用意され、それを潜り抜けることで成長への歩みが保証されることは、「通過儀礼」とよばれて、周知のように、伝統的社會が作り出した一つの知恵であった。(中略)。伝統的社會の知恵は、非一人前の者たちを一人前の成員として共同体に組み入れるべく、そのための確固たる道を用意してき

た。子どもたちの前には、時として障害とすらみえる困難な課題が設定されているのだが、そして、そのことで幼い者たちには苦しい修行と努力が要請されはしたが、しかし課題が克服されさえすれば、彼らが成人社会の一員として生きる道が保証されていたわけである。

そして本田は、近代社会における若者の「通過儀礼」を上記と対立させて、次のように述べた。

産業化の進んだ近代社会では、それぞれの伝統集団に設定されていた通過儀礼を消滅させ、その代わりに、すべての子どもたちを「学校教育」という単一の進路に組み込んでしまった。(中略)。子どもたちは、階段状に設けられた学年を定められた通りに辿って用意された課程を修了するなら、「卒業」というかたちで一つの門をくぐり抜けたとされるのである。(中略)。卒業時に子どもらが獲得したものは、基礎学力という抽象的な基準で画一的に判定された関門通過能力に他ならない。彼らが外の社会に出て行くためには、格別の資格も技術も、そして自信さえも、身につけてはいないというのが実情であろう。

本田は、現代の若者の成長の困難さは、こうした「通過儀礼」の変質、あるいは消滅に起因するという見解に賛同し、「この節目らしからぬ節目に困惑し、出口に立たされて戸惑う子どもたち」の存在に言及している。『スタンド・バイ・ミー』では、少年たちが「死」と直接的に向き合うことによって、一つの関門をくぐり抜け、大人として歩みだす光景が描かれていた。しかし一方で、本田の述べる通り、彼らが否応無しに「卒業」という出口に立たされ、何の指針もなく途方に暮れる姿も同時に描かれている。彼らがその後、どのように我が身に背負った条件を受け入れ、大人になっていったかは、推測するより他ない。では果たして、現代の若者は「学校教育」という関門をくぐり抜ける中で、どのような困難に遭遇し、どのようにそれに対処し、そこから何を学び取っているのだろうか。「通過儀礼」の変質は、どのような点に影を落としているのか。このような問題も、学生の回想から読み取りたい点として挙げておきたい。

#### 4. 青年期(思春期を含む)の親子関係、友人関係の一般的なモデル

##### (1) 青年期の親子関係

かつての青年期の親子関係は、親に対する心理的分離や反抗、親子間の葛藤、ジェネレーションギャップが特徴としてあげられ、それらを体験する青年期を疾風怒濤の時代と考えるのが一般的であった(平石, 2006)。親と子の二つの世代の間には、超えがたい溝があり、それが青年に強い危機感をもたらす一方で、自分の中に親とは異なる新たな価値観を築い

ていく原動力にもなっていたのである。

一方、現代の青年期の親子関係は、かつてとは異なり、「愛着と自律」が重要視されている点が特徴で、特に「愛着」は、青年期になってもなお、親にとっても子にとっても重要な意味合いを持っている（平石, 2006）。例えば深谷（2004）は、中学生に対する質問紙調査の結果、母子関係が中心ではあるが、総じて親子関係がうまくいっている中学生が多く、第二反抗期的な険悪な親子関係ではなく、仲の良い親子の姿が見えてくると報告している。そして、第二反抗期の危機を経験しないことは、子どもが自立のステップを踏んでいないことの表れであり、子どものパラサイト化傾向に拍車がかかることを危惧している。確かに、現代青年の依存の長期化は多くの研究が指摘しているところである。その要因として、宮本・岩上・山田（1997）は、親の子どもに対する投資期間の長期化と投資量の増大をあげている。そして、「親の愛情のあかし」という名のもとに親から子への一方的な援助が拡大し、子どもの役割や責任については問われない関係に陥っているために、親は子どもに自立した大人として生きていく力を与えることができていないのではないかと指摘している。親の承認を受けなくとも、自分の価値観によって決断したり、その責任を負う力が身につかぬまま、大人になっているということであろう。また、「子どものために」という長期的な援助が可能になっている背景には、「子どものためにすること」が親のアイデンティティになり、他に生きがいが見つからないという心理的条件と、親に経済的な余裕ができたという経済的条件の二つが揃ったことをあげている（宮本・岩上・山田, 1997）。

本論では、学生らに「親は自分をどう見ていたか」、また、「自分は親をどう見ていたか」を書かせることによって、上述したような現代型親子関係が見られるのか、その点も確かめたいと考えている。

## （2）青年期の友人関係

青年期は、映画『スタンド・バイ・ミー』の最後にもあるように、一生の友と呼べるような特別な友人関係を形成する時期でもある。青年期の特別な友人関係の形成の意義は、岡田（1992）によると、1）青年自身が両親など大人の生活や規範に疑問を持ち始め、自分なりのあり方を模索する時期であり、そのため両親よりも同世代の人間のいうことに共鳴できるようになってくること、2）身体的成熟と精神的未熟のアンバランスから情緒状態が不安定になりやすく、友人との深い情緒の関係は、不安定から立ち直る意味で重要な役割を果たすこと、3）緊密な友人関係を持つことは、両親からの心理的離乳、自立を促すことがあげられている。また、宮下（1995）は次のような点をあげる。1）自分の不安や悩みを打ち明けることによって情緒的な安定感・安心感を得る（「自分だけではない」という気持ちをもてる）。2）自己を客観的に見つめる：友人関係を通して自分の長所・短所に気づき内省する。3）人間関係が学べる。楽しいこと嬉しいことだけでなく、傷つ

き、傷つけられる経験を通して、人間としてよいこと、悪いこと、思いやりや配慮を学ぶ、の三点である。

本論では、以上の点を踏まえ、「友人は自分をどう見ていたか」と「自分は友人をどう見ていたか」を書かせることによって、思春期のときの友人関係が、学生らにどのような意味合いで捉えられていたのかをみる。そして、友人関係が思春期の葛藤にどの程度、またどのように影響していたのかも検討したい。

## 5. 現代の若者像を特徴づける要因について

先には、青年期の親子関係と友人関係の一般的な発達モデルを提示したが、ここでは現代の若者の自己形成と友人関係に影響を及ぼす要因についての主張を二つあげておく。

### (1) 子どもを取り巻く環境の変化—消費文化世界

中西(2001)は、現代社会の最も大きな変化—親世代と現代の若者の世代を分ける変化として、消費文化世界の到来をあげている。中西によると、消費文化世界とは、メディアによって多種多様な情報が大量に生産され、大量に普及し、大量に消費される世界を指す。現代の若者たちは非常に幼い頃から、パソコン、携帯電話等の情報端末に触れながら成長している。そこから得られる大量の情報(不特定多数に向けられる情報ばかりでなく、友人同士のコミュニケーションツールでもある、メール、ソーシャルネットワーク、ツイッター等を含む)に日々曝されている。こうした消費文化の享受が、生活の不可欠の一部であり「生活必需品」になっていることを中西は指摘する。そして、「自分たちがどうみられ、何と言われてどのように扱われるかを、メディアを測定器(道具)にして測ってゆく「生き方」は、大人の世代が経験したことのない新しい事態」であり、そのことが、大人が現代の若者を理解する際の障壁になっていると主張している。この消費文化は子どもたちに文化的なまとまりや基準を提供するのだが、それは「消費」と名のつくとおりに、どんどん変化していくので、自分たちを測るモノサシも子どもにとってつかみどころのないものとなる。中西はこのことについて、以下のように述べている。

人間関係をつくるとは、そういうモノサシをよくのみこんで、そこから外れぬように振る舞うことを意味しています。相手にある程度合わせたり、流行を外さない、外す場合には自分なりのポリシーをもっているんだぞと周囲にわかるようにしておく、「外見だけで判断しないで」と言いながら、外見はしっかり流行にはまっている・・・ときには矛盾するくらいのそれらの振る舞いを縛っているのは、同世代の他者が自分をみるさいのこの評価体系です。

現代の若者たちは、このように曖昧な評価体系に縛られ、自分が「外れて」しまわぬよ

うに、常に新しい情報を仕入れられるよう、神経を研ぎすましながら思春期を過ごしている。思春期の子どもは、他者の目を通して見た自分を強烈に意識することを特徴とするが、現代ではさらに、消費文化に支えられた基準をもとにして、他者からどのように見えているかに、子どもたちは最大限の注意を払うことになる。

また中西は、消費文化世界に深く結びつくものとして、「個体化の進行」をあげている。ここでいう「個体化」とは、一人一人が自己の責任において個別に行動することを指す。若者の間には、「何をしようと、他者に迷惑をかけていなければ、勝手であり、その人個人の問題」という考え方が浸透している。例えば、電車の中で人目をはばからず化粧をしたり、路上に座り込んで飲食をする若者の姿が、大人の常識に反するものとして注目されたが、若者にとっては人に迷惑をかけていないのだから、その人の自由ということになる。そうしたことに口出しすることは正しくないという、大人とは異なるモラルを持っているのである。個を尊重するこうした生き方は、一見楽なようで、反面、「自由」であるからこそ、他者の承認や注目を得ることなく、孤独に生きる強さを必要とする。しかし、思春期の子どもの自己形成は、他者の承認なしには成立しない。また、学校において孤立することは、自分の存在自体が危ぶまれる「透明人間」として生きていくことを意味する。したがって、子どもたちは「自分の勝手」と言いながら、しかし「無視されたくない、認められたい」という矛盾した欲求を抱え、なおかつ「人に口出し」しないよう自分の考えを飲み込みながら友人関係を維持するという、涙ぐましい努力をしていることになる。

## (2) いじめを生む「優しい関係」

この節では、さらに最近の若者の独特な友人関係に焦点を絞って展開する。

土井(2008)は、最近、中学・高校でみられる特徴的ないじめは、若者の友人関係の根底に横たわる「優しい関係」に起因すると主張している。「優しい関係」とは、他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないことを危惧する「優しさ」と、逆に、他人と積極的に関わることで自分が傷つけられてしまうかもしれないことを危惧する「優しさ」を重視し、成り立っている関係性を指す(大平, 1995)。確かに、筆者も学生相談室の相談員を担当している中で、現代の若者が非常に傷つきやすく、またその傷が癒えにくい印象を持っている。そして、若者の口から頻繁に、「～のせいで、私、傷つきました」という言葉が発せられるのを耳にする。言葉にこそなっていないが、「だから～をゆるさない」という響きがそこにはある。「傷つき」という言葉はかつてないほど一般化し、また、他者を傷つけることは、若者のモラルに照らせば、もっとも罪深いことのものである。

土井(2008)によると、現代の若者は、「優しい関係」を維持するために、きわめて注意深く気を遣いあいながら、なるべく衝突を避けようと慎重に人間関係を営んでいる。本来、思春期における友人関係は、お互いの対立や葛藤を経験しながら、訣別と和解を何度も繰り返すなかで、だんだんと揺るぎない関係として創り上げられるものであった(土井,

2004)。「親友」と呼べるような友人には、自分の率直な思いをストレートにぶつけることができ、対立しても簡単に関係性が壊れてしまうことはなかったのである。一方、「優しい関係」に基づく友人関係は、対立を内に含み込みつつも、関係を維持することにのみ注意が払われているので、きわめて表面的で希薄なものであり、何気ない(気配りのない)一言で簡単に壊れてしまう危険をはらんでいる。彼らがこの人間関係にすがるのは、その関係性こそが彼ら自身の自己肯定感を支える基盤となっているからである(土井, 2008)。

この「優しい関係」と現代型いじめの発生には関係があると土井は指摘する。現代型いじめとは、いじめのターゲットが固定されず、気まぐれに転じていくタイプのいじめを指す。土井は、こうしたいじめの理由に客観的な根拠を見いだすのは難しく(なぜその子がいじめなのか、という理由は見当たらない)、あくまで「優しい関係」を維持することで成り立つ人間関係の重さを軽くするために、いじめが起きていると仮定する。そしてそのいじめは、熾烈というよりはあたかも遊びやゲームの延長のように展開されることが多い。したがって、自殺に追い込むほどのいじめであっても、教師や友人でさえもそこにいじめが起きているといることを認識できなかった例もある。以下に土井の言葉を引用すると、

かくして「優しい関係」を営む子どもたちは、いじめて笑い、いじめられて笑う。傍観者たちもまた、それを眺めて笑う。互いに遊びのフレームに乗りきり、彼らが「いじり」と呼ぶような軽薄な人間関係を演出することで、いじめが本来的に有する人間関係の軋轢が表面化することを避けようとする。そのテクニックは、テレビのバラエティ・ショーなどから学ばれることも多い。互いに「いじり」あうことによって観客の笑いを取る芸人たちの言動は、彼らの教科書として機能している。

このような方略を採用することによって、いじている側は、いじているのではないと主張できるし、いじめられている側も、自分は「いじられ(・・・)ている」と考えることで、何とか自尊心を保つことができる。こうして人間関係の軋轢はほやかされていく。

以上、二つの側面から若者を特徴づける要因をみていったが、両者は互いに関連しあい、現代の若者の生きづらさや安心できる人間関係の構築を困難にしていると考えられる。こうした点も踏まえながら、若者の回想文を分析する。

## 6. 方法

〈対象者〉教員免許取得を目指す名古屋芸術大学音楽学部の学生 41 名<sup>(1)</sup>。学年は 1 年から

---

(1) 本論は、教職を目指す学生が、中学・高校の生徒指導を考えるために、自らの思春期の葛藤を思い出し、記述した回想録をもとにしている。この回想録の作成は、教職科目である「教育相談」の授業の一環として実施された。

4年。

〈手続き〉学生らに映画『スタンド・バイ・ミー』を鑑賞させ、以下の質問に答えさせた。映画の感想も書かせたが、これは分析の対象になっていない。

- ① 子どもだけで、遠くに出かけるような冒険をしたことがありますか。
- ② あったらそのときの様子を描いてください。
- ③ 思春期の頃、親から見て、自分はどんな存在だったと思いますか。
- ④ 自分は親をどのように見ていたでしょうか。
- ⑤ 思春期の頃、兄弟、姉妹から見て、自分はどんな存在だったと思いますか（兄弟、姉妹のいる人のみ）。
- ⑥ 自分は兄弟、姉妹をどのように見ていたでしょうか。
- ⑦ 思春期の頃、友人から見て、自分はどんな存在だったと思いますか。
- ⑧ 自分は友人をどのように見ていたでしょうか。
- ⑨ 思春期の頃、辛かったこと、悩んだことを書いてください。
- ⑩ それをどのように乗り越えてきたのか、書いてください。

質問は、思春期の頃、自分は周りの人をどのように見ていたか、のみでなく、自分は他者からどのように見えていたかも書かせた。そうすることによって、当時の自分を客観的に見つめることを促した。

〈分析の指標〉

- (1) 子どもだけの「冒険」を通して得られたもの：①と②を合わせて、学生らが子ども時代に「冒険」を体験しているか、また、そのときにどのように感じたかを分析した。
- (2) 反抗期の有無と親との関係：③と④を合わせて、思春期の頃、学生らが親と自分との関係をどのように受け止めていたのかを分析した。また、現時点で学生らが自分は反抗期を体験したと捉えているか否かもみた。
- (3) 兄弟との関係：思春期の親子関係を考える場合、当然、家族の構成員である兄弟の影響も見る必要があると考えた。これは⑤と⑥を合わせて分析を行った。
- (4) 友人との関係：⑦と⑧を合わせて、学生らが思春期の頃にどのように友人を捉えていたか、また、他者から見て自分はどのような存在だったと思っていたのかを分析した。
- (5) 思春期の葛藤とそれを乗り越えた契機：⑨と⑩を合わせて、学生らにとって、思春期の葛藤がどのようなものであったのか、また学生らが葛藤を乗り越えるきっかけになったのは何と考えているのかを分析した。

## 7. 結果と考察

結果は表1にまとめた。この表は、学生の回想文の要点のみを取り上げて記入したもの

である。また、本人の特定ができないように、個人を推測させる記述は除いてある。表の最初の列は学年と識別場号を「学年—番号」として表した。結果の記述における( )は、この「学年—番号」が記してある。

(1) 子どもだけの「冒険」を通して得られたもの(質問①、②)

子ども時代から思春期にかけて、何らかの「冒険」をしたと報告している学生は、41人中35人(85%)であった。その中で、多くの学生が、わくわくした高揚感と充実感を味わったことを記している。また、子どもだけで目的を果たしたという達成感や(4-2, 4-4, 2-18)、自分も少し大人に近づいたというような成長を実感した学生もいた(4-5, 3-1, 3-11, 1-3)。大人目から離れたという自由を渴望する様子も見て取れた(2-2, 2-7, 2-11)。一方、逆に自分の無力さを実感したり(3-8, 2-8, 1-4)、親の存在の大きさを再認識した(1-5)とする報告もあった。もう自分で何でもできるという気持ち、大人に近づいている実感を持つ一方で、親への依存や自己の無力さにも気づいているという、思春期特有のゆれがここに見て取れる。

(2) 反抗期の有無と親との関係(質問③、④)

思春期に反抗期を体験したと明確に認識していた学生は41人中26人(63%)であった。これははじめに述べたマイナビの調査より、高い比率になっている。マイナビのデータがどのような学生を対象にしているかが定かではないので、簡単に比較することはできないが、本研究が、本学の芸術家を志す学部の学生を対象にしていることから、一般的な大学生より、そもそも葛藤が強い性質を持ち合わせている学生が多いことの表れかもしれない。実際に、本学の相談室を訪れるのは、大学生となっても人間関係に対して強い葛藤を抱えている学生が多く、その過敏さや自己肯定感の弱さを筆者も学生から感じ取ることが多い。

4.(1)では、現代の親子関係における「愛着」の重要性を取り上げたが、反抗期を経験している学生の中でも、親から愛情を受けていることをひしひしと感じ取っていた学生もいた(2-5, 2-12, 2-17)。また、過去を振り返り、自分の反抗期の行動について申し訳なかったと思う学生や(3-6)、親の自分に対する配慮や、それに向けての感謝を述べる学生もおり(4-1, 3-8, 2-1, 2-3, 2-10, 2-14, 2-18, 1-5)、現在の親子関係の良好さを推測させる。一方、現在、親との間に距離があることを思わせる学生の記述も見られた(4-2, 2-1, 2-9, 2-13)。これらの学生は、4.(1)で述べた「かつての若者像」を彷彿とさせる。また、3-2は、「母に頼りたい気持ちと母を避けたい気持ち」、そして「尊敬し、憧れの対象として母を想う気持ちと、母のようにはなりたくないという否定的な気持ち」の間でゆれる、典型的な思春期の親に対する葛藤を記している。

明確な反抗期を体験しなかった学生の中には、子どもの頃は親の価値観が絶対であると感じていたが、思春期になって、親も一人の人間であると気づいたこと記述しているもの

がいた (4-4, 3-1, 2-16)。親の価値観に対して強い違和感を感じ、それを徹底的に否定する典型的な反抗期とは異なり、彼らからは、親の人間的な一面 (間違いや欠点) を垣間見、それを受け入れることによって価値観の違いも許容するような姿勢が感じられた。

### (3) 兄弟との関係 (質問⑤、⑥)

兄弟に関する記述の中で多かったのは、兄弟との比較の中で自分を判断していると思われるものであった。それらを分類すると、兄弟を見下す記述と (3-1, 3-2, 3-10, 2-16)、うらやみ記述 (3-2, 3-5, 3-7, 3-8, 3-11, 2-2, 2-8, 2-11, 2-15, 1-1, 1-4) とに分かれた。また、親に認められている、もしくは親にかわいがられている兄弟 (自分だけが親から厳しくされている) に対するうらやみや嫉妬の気持ちが書かれているものもあった (4-3, 3-2, 3-7, 3-8, 3-10, 2-6, 2-11, 1-1)。以前、思春期の子どもが「兄弟は、存在するだけでストレスだ」と言っているのを耳にしたが、まさに、彼らにとっては、兄弟は常に比較の対象であり、また親からの愛を取り合うライバルのように感じられ、そのことが思春期のストレスの一要因であろうことが、学生たちの記述から見て取れる。しかし、思春期の頃には兄弟に対して負の感情を持っていた学生でも、現在では良き相談相手になっていたり (2-18)、尊敬する対象となっている場合があった (3-8, 2-1)。

### (4) 友人との関係 (質問⑦、⑧)

ここではまず、4. (2) で述べたような特別な友人関係の形成が、学生らの記述に見られるかを調べた。友人を信頼し、助け合ったり、楽しい時間を共有したりなど、自分にとって大切な存在として肯定的に捉えた記述をしている学生が41人中18人 (44%) いた。「支え合うこと、助け合うことの大切さ、協調性や信頼関係を築くことの大切さを教えてくれた (4-1)」というように、よりよい人間関係を形成するための基本的な事柄を友人関係から学んだといえる学生や、「自分の存在価値を見いだした (3-2)」のように、他者から信頼や承認を得ることによって、自己肯定感を見いだしたと考えられる学生もいた。中には、切磋琢磨し合う関係 (2-9)、時にはぶつかり合った (2-18)、傷つくこともあった (2-13)、と、負の面も乗り越えてきたことによって、絆が強くなったことを記す学生もいた。素の自分を出せる存在として友人を捉えていた学生もいるが (2-1, 2-5, 2-17)、彼らは、その友人を除けば、思春期特有の息苦しい友人関係の中にあつたことを推測させた。

一方、友人と距離をとってつき合っていたり (4-3, 4-5, 3-7, 3-8)、無理をしたりなど (4-1)、心地よい友人関係を形成できなかった学生が、41人中8人 (20%) いた。上辺だけの付き合いだったと記した学生は (3-10, 1-5)、なんとか友人らに嫌われないようにと、無理をしながら友人関係を維持していた様子がうかがわれた。これは5. (2) で述べた、現代の若者がきわめて注意深く気遣いながら、なるべく衝突を避けようと人間関係を営んでいるという土井 (2008) の指摘に一致していると考えられる。

## (5) 思春期の葛藤とそれを乗り越えた契機 (質問⑨、⑩)

思春期に辛かったこととしては、友人関係 (学校での人間関係) をあげているが学生が一番多く、41 人中 23 人 (56%) であった。中には、はっきりといじめにあったと記述した学生もいた (4-2, 3-6, 2-10, 2-18, 1-3)。友人関係の悩みの中で多かったのは、「悪口を言われる」ことであった (3-3, 3-4, 3-5, 3-9, 3-10, 2-17, 1-4)。些細なことから人間関係が壊れた体験を報告する学生もいた (4-3, 2-3)。また、友人をめぐる葛藤の中には、上でも述べた、友人の顔色をうかがいながら関係を維持することと、5. (1) の中西 (2001) が指摘した、「曖昧なモノサシ」に外れないようにすることに必死になっている若者の姿が浮かび上がってきた。例えば、2-3 は「人と関わるときは顔色をうかがい、自分のことは話さない」ようにし、2-5 は「自分はなんでこんなに頑張っているんだろう。友人に対してなんでこんなに気を使って生活しなければならないんだろう」と思いを巡らせた。また、土井 (2008) が示した「現代型いじめ」を報告している 2-10 (このいじめの型は 3-10 も報告している) は、「あの頃の私たちは、中学生ながらその場の空気を必死に読んで、日々いろいろなことと闘っていたのだと思う」と記述している。現代型いじめが発見されにくい理由は、土井 (2008) の指摘するように「いじめ」と「いじり」の区別がつきにくいばかりでなく、中西 (2001) の指摘する「曖昧なモノサシ」を、大人たちは見ることができないからではないだろうか。若者たちの記述からは、彼らが大人目からは見えないうところで、必死に闘っている様子が浮かび上がってくる。

では、友人関係の葛藤を乗り越えた契機としては何があげられているだろうか。まず、友人に支えられたことをあげた者が一番多く (4-2, 4-3, 3-2, 3-5, 3-9, 3-10, 2-4, 2-10, 2-18)、次に親によって支えられたことをあげた者が数人いた (2-3, 2-17, 2-18)。教員が支えとなったと記した学生は 2 人のみであった (4-2, 1-3)。そういう学生の中には、現在でも、支えてくれた人が自分にとってかけがえのない存在であったと感じたり、感謝の気持ちを持つ者もいた (3-5, 2-3, 2-17, 2-18)。

次に多かった思春期の葛藤として、親との葛藤をあげたものが 41 人中 8 人 (20%) であった。その中には、親から承認されていないと感じていた者 (3-7, 2-9)、親との対立をあげた者 (2-7)、親とのコミュニケーション不全をあげた者 (4-4, 3-11, 2-8, 1-1)、親の期待に応えられない辛さをあげた者 (2-5) などがいた。これらを乗り越えた契機としては、親から承認されていないと感じていた 3-7 は、自己啓発本を読むことで、自分自身を承認できるようになったことをあげ、2-9 は親と距離をとることで自分を守ったと感じていた。親と対立していた 2-7 は、不満を親にぶつけることで区切りをつけたと感じたが、自分の好きなことに出会ったことで、2-9 と同様に親と距離をとることができたのかもしれない。親とのコミュニケーション不全をあげた 4-4, 3-11, 1-1 は、親に助けられている自分を発見するなど、自己理解が進むことによって、親と歩み寄れるようになったことを報告して

いる。一方、2-8は、祖母から親の子ども時代を聞き、親を理解することによって自分との共通点を見いだしたことをあげている。これらの若者たちの記述からは、親との葛藤を乗り越えるために友人などの外部の力を支えとするよりは、自己理解、もしくは親理解を深めることによって、両者の距離を縮めたり、逆に距離をあげたりしながら調整している姿が浮かんでくる。

親に対する葛藤を報告した学生と同数の学生が、自己についての悩みを思春期の葛藤としてあげていた。これらの報告は、自己の性格や気持ちに関わる問題をあげている者（4-6, 3-7, 2-2, 2-11, 2-13, 2-14）、自己の存在価値や「本当の自分」といったアイデンティティに関わる問題をあげている者（3-2, 3-5, 1-2）とに分かれた。自己にまつわる思春期の悩みは、かつての若者も、現代の若者も全く変わっていないようである。そして、その乗り越え方も、今もかつてと変わりなく、周囲の人たちの承認と支えによって乗り越えられていることが、学生たちの回想文から読み取れた。周囲の人たちとは、例えば、友人であったり（3-2, 3-5）、教師であったり（4-6, 1-2）、人生の先輩（祖父母を含む）であったり（3-7, 2-2）、また人生の先輩ともいえる人々によって記されている書物やメディアをあげている学生もいた（3-7, 2-13, 2-14）。

以上をまとめると、現代では、親や大人に対する明確な反抗心がすべての若者にあるわけではないが、多くの若者が、自分や友人や親に対する葛藤を抱え、悩みながら大人になっていくことがわかる。そして、かつてと変わりなく、周囲の人々に支えられながら、自己を形成していく姿が見て取れる。

表 1 大学生の回想文

学年-番号	①冒険	②その時の様子	③親から見て自分は	④親をどう見ていた	⑤兄弟から見て自分は
4-1	電車に乗って映画館へ。	緊張。はしゃぐ。	反抗期なし。 良い子。	母は、よく育ててくれているな。	兄。 出来のいい弟。
4-2	隣町まで自転車です。	とても遠い場所に感じた。自分たちで目標を決めて行動することに、充実感と達成感を感じた。	反抗はしなかった。正直で素直。人に影響されやすい危なっかしい子ども。思春期は、あまり反抗しない、頭の良い子。	両親を男と女として見ていた時期があった。父を軽蔑し、母を分かり合えない人間と思いつつ、両親への思いは冷めていた。	妹。 頼れる存在。
4-3	中3のとき、友人らと東京へ。	新鮮。	反抗期あり。何を言っても反抗ばかりで、親はうんざり。今となっては、自分のために言っていたと思うと感謝。	口うるさい。親なんていない方が楽だ。	姉。 冷静な目で見ていた。
4-4	いとこの家に妹と。	様々な体験。楽しかったことや悔しかったことを乗り越えて、目的地に着いたときは、安心感。大人に近づいた達成感。	反抗期なし。 落ち着いた子ども。	母を絶対的な存在と思う。母が乗る電車を間違えたとき、母が間違えるんだと気づいた。	妹 よく褒められる自分を嫉妬。小心者。
4-5	一人で祖父の家に。	わくわくした。大人になった気がした。	特に反抗はなかった。楽器の練習が嫌い、母は少し手を焼いたかもしれない。	ふとした瞬間、自分はなぜこの人の子どものなか、考えた。母は他人だけと他人でない、よくわからない存在。	姉 仲のよい年下の友だち。
4-6	友人と他学区の廃墟へ。	死体があるかもしれないという、どきどき感。友だちの奇妙な表情。	反抗期の認識なし。親は自分よりも弟に一生懸命であった。	もつと甘えたかった。親に腹の立つことはあったが、裏には出さなかった。友だちの家庭との違いに動揺した。	口が達者な怖い存在。
3-1	隣町へ。	大人のを借りずに少し自分が成長した気分になった。自分が住んでいる町が小さく見えた。	反抗期やや弱目 子どもらしい子ども	親の欠点を見つけることが嫌な時期。完璧な人間だと思って信頼していたので、勝手に裏切られた気持ちに。今は親の欠点も受け入れられる。親も人間。	姉。 小さな子ども。
3-2			反抗期あり。「思春期だな」と冷静に見ていたのでは。自立したいけどしたくない。必要以上に干渉されると喧嘩に発展。母に辛い思いをさせてしまった。	母に頼るのが恥ずかしい。母を避けたい。尊敬、あこがれの対象と見ることもあったが、母のようになりたくない、否定的に見ることもあった。	兄 母親にかわいがられている自分を憎らしい。喧嘩ばかり。
3-3	いとこと電車で乗って、5つ先の駅まで。	帰りは電車が連休し、線路を辿って帰ってきた。とても楽しかった。子どもだけでも知恵を絞れば何とかかなと思った。	反抗期の記述なし。やはりいことに没頭する。甘えたい放題でわがまま。厄介者。	末っ子の自分は親からあまり愛されていないのではと思っていた。しかし、高校のとき部活の大会を遠いのに見に来てくれたとき、愛情を感じた。	兄、姉。 面倒くさがり、意地っ張りな性格。
3-4	幼い頃から知らない場所へ行くのが好きだった。		反抗期あり。まだまだ子ども。兄弟の仲では頼れる方。	親の言っていることが理解できず、強い反抗心を抱いていた。	兄、弟。 兄にはやつあたりされた。弟はかまって欲しいと思っていたのでは。
3-5	祖母の家の雑木林。		反抗期なし。進路で少し衝突。	疎ましく思ったことはない。	兄。 喧嘩。ストレスのはけ口。
3-6			反抗期あり。どうしようもない子。母に反発。ひねくれていて、友達をいじめて、先生から呼び出された。母の悲しそうな顔。今では、母、先生、友達に申し訳ないと思う。	母によく言い返す。今は当時を振り返って後悔。	姉、妹。 自己中心的。

⑥兄弟をどう見た	⑦友人から見て自分は	⑧友人をどう見た	⑨思春期の悩み	⑩どう乗り越えたか
	明るくてまじめ。元氣。	楽しかったが、無理はしていた。	吹奏楽部一節活でできないことがあったり、同じパートで自分よりうまい人がいると辛かった。	ひたすら練習。目標に向けて努力。
かけがえのない存在。	リーダー的存在。相談役。	信頼できる仲間であり、大切な存在。支え合うこと、助け合うことの大切さ、協調性や信頼関係を築くことの大切さを教えてくれた。	いじめにあった。部活と勉強の両立。	小学校時代からの親友が味方でいてくれた。親友の支えと自分の頑張り。教員に支えられた。
自分ばかりが頼りからしかられていると思っていたので、姉に八つ当たり。	相談を受けたり頼られたり、みんなのはげ口。	一歩下がって友人を見て、自分に合うかどうかを頭で考えてからつき合った。	仲の良かった友人と些細なことから喧嘩し、それ以来、ほとんど話さなくなった。高校のときは、一番はじめにできた友達が急に話してくれなくなった。	周りの友達に支えられた。同じような悩みを抱えている子にすべてを打ち明けた。
頼りになるが、ずる賢い。	明るく面白い。心配事をすぐに口にするので、うじまじしていると思われたことも。	いつも慰めてくれる。感謝している。	悩みや不安を抱えたとき、母がそばにいなかったこと。	相談できなかったので、困難なことを投げ出すことも。それでもしなくてはならないことができないと、癪瓶。母と一緒に解決法を探してくれた。母や友人には感謝している。
仲のよい友だち。切っても切れない存在。	自分の世界を持っている。	いろいろなタイプの友だちがいた。	人の目が気になった。マイナス思考。心が芯から安らぐ時はなかった。今はあまり悩まなくなった。	一冊の本との出会い。マイナス思考をやめようと思った。心が前向きになり落ち着けた。
子分。比較的仲がよい。思春期を境によい意味で一番身近な他人となった気がする。	マイペースで気が利かない存在。	相談に乗ってもらったり、仲良くしたかったが、実際には距離を置いていた。周りで起こるいじめや喧嘩によって、友だち関係が怖くなった。	勉強、友達、習い事のすべてが中途半端に思えて辛かった。将来が不安。	ピアノの先生に褒めてもらったことがきっかけでやる気が出た。
長女を尊敬。次女を見下す。今は申し訳ない。	仲の良い友からはほげ役と思われる。親しくない人からはキャラがつかめない。	たまに不信感を抱きつつ、家族よりも友だちの方が好き。部活の友人は貴重な存在。	小学校の頃、仲の良かった友人と、中学で距離を感じる。悩みを自分ではなく他の友人に相談していた。	ポジティブにならないといけない。友人関係を広げよう。他の友だちを作る。小学校の友人も、自分の世界を広げようとしていたのだと解釈。
出来の悪い兄を見下す。男というだけで祖父母からかわいがられていた兄を憎く思うと同時にうらやましく思う。	感情の浮き沈みが激しい。友人に助けられたことは多々ある。	自分を頼ってくれる友人が得意、自分が強くなった気がした。自分の存在価値を見いだした。	自分の存在価値。兄のこと。失恋。浅い友人関係。	友人に支えられた。笑わせてくれたり、時には叱ってくれることもあった。友人から必要とされることで自分の存在価値を見いだした。
姉はよき理解者。兄は遊び相手。今は真面目な話もし、前より好きになった。	基本恥ずかしがり屋。仲の良い友達からは、いつも楽しそうだが、何を考えているかわからない。	友達が自分と同じ物を持つと、自分の個性が消えてしまうと思った。今では、外見ばかりにとらわれていたと思う。	部活の副部長をやっている、コンクール間近に部員に厳しくしたら、「うざい」と言われた。だんだん一人になっていくようだった。	高校はみんなを見返す気持ちで、部活の盛んなところへ行った。今、教職を目指して、あの頃の自分の何か行けなかったのかわかりはしめた。
むさ苦しい。	友達は少なかった。中学では勉強仲間。高校では馬の合う仲間。	高校時代は、とても楽しく過ごせたので、感謝していた。	中学ではからかわれるのが嫌で本を読んでいた。それでもからかわれ、悪口を言われた。自分がこんな人間だから仕方ないと思っていた。	中学では、ひたすら耐え、一人で悩んだ。高校では勉強で苦しんだが、友人ができたことで乗り越えられた。大学は今までの人生の中で一番楽しい。朝、「おはよう」と声をかけてもらえる幸せ、「みんな」の中に自分も含まれている幸せは、中学の頃の辛い経験があったからこそ感じられると思う。
何が嫌で兄と喧嘩していたか分からない。ものすごくうとうしい。	活発、明るい子。	高親と問題はなくても、友人といえる方が楽しい。すごく助けられた。	学校生活、人間関係、進路、部活。「出しゃばっている」と言われる一みんなの前に出るのをやめ、本当の自分が分からなくなった。	友人に支えられた「何を言われても自分らしくいばい」。ふっさる。自分を隠さずにいるように思う。間違ったことを言っても正してくれる。かけがえのない存在。
自分になにもをたくさん持っていて、うらやましく思った。	わがままで子どもっぽい。友人を独り占めしい。他の友達の良いところを、友人に不快な思いをさせた。今は反省。	男の子にチャホヤされている友達をうらやましく思った。いつも明るい友人を見てはうらやましかった。	中学校でいじめにあった。高校受験で努力したが、成績が伸びなかった。志望校のランクを一つ落とした。	自分も小学校のときにいじめていたので、自分の過去の過ちを反省した。高校のレベルを落とすことで、辛くはあったが、入学した高校の良い面を見て、劣等感を乗り越えた。

学年-番号	①冒険	②その時の様子	③親から見て自分は	④親をどう見ていた	⑤兄弟から見て自分は
3-7	友達と隣町の公園へ自転車。で。	自転車どこへでも行ける気がした。	③親から見て自分は (反抗期の記述なし。) こだわりや我が強く、言うことをあまりきかない子。 自分で何でも決めるので楽な反面、扱いが難しい子。	④親をどう見ていた 自分には関心がない、自分も部活であり家にいなかったため、親の記憶に残っていないだろう。	⑤兄弟から見て自分は 兄、姉。 興味を持っていなかっただろう。邪魔な存在だったかもしれない。
3-8	小らのとき、いとこと山へ。	迷子になり、帰りが遅いことを心配した親に発見された。怖くて、山がトラウマになった。	反抗期あり。 母よりも父に対して、両親とも自分を子ども扱い、帰りが遅いと心配して涙まで流す親に対して、自分は二人にとって大切な存在なんだと思うこともあった。	将来の不安をおおって勉強しなさいという言われると、うっとうしく思った。一方で、自分より早く起きて朝食を作ってくれる母に感謝。	姉。 姉は下のことを考えて、進路を決めていたので、わたしも気持ちもあつたのでは。
3-9			反抗期なし。 相談相手。	高校生のときはたまに親の発言の矛盾が気になった。	妹。
3-10	中一の時の社会見学	親なしで電車に乗ることがが衝撃的。 何とも言えない高揚感。	反抗期あり 小さい頃は大人しくもの静か、何でもできる。 思春期は親に反論、言うことを聞かない、無視。後で部屋で泣く。落ち込んでいると話を聞きにくく一親は自分のことで悩んでいなかったのでは。	高校受験のとき、親の学校や今の職業に就きたいきさつを聞いた。親が流れに身を任せて、何となく今があるのわかって、親を見下すように今はそこでしっかり働いて頑張っていることを理解できる。	弟。 喧嘩で力でおねじ伏せられた「もう姉ちゃんには負ける気がしない」ショック。 しかし弟も自分に対してコンプレックスがあったのだと気づく。弟にとっては確まじい存在。
3-11	少し遠いところへ。	わくわくした。 大人に少し近づいた。	反抗期あり。 小3、4頃から高校まで扱いの難しい子。 父に対して反抗一父も悩んだのではないか。	干渉してくる、うっとうしい存在。顔を合わせるのもいや。自分が何を言っても理解してくれない。	弟と妹。 なぜ自分が反抗しているのか、わからないだろうな。
2-1	名古屋から岐阜まで自転車。		反抗期あり。 中三から高三まで迷惑ばかり一いつかは思返したい。	うっとうしい存在。 現在は、親は子どもが一番大切だと分かる。自分が親になっても同じことをするだろう。	姉。 うざい存在一よく喧嘩今では自分から譲る一少しは大人になったと思う
2-2	近くの森。	自立した気分。 親の言いなりになることに嫌気一少し離れたかった。 挑戦することを知った良い経験。	反抗期あり。 親は怒らないので、良い子でいなければ一家族とは全く話さなくなる。 扱いにくい迷惑な存在。	自分よりも妹を大切にしている。	妹。 自分と親が喧嘩している。
2-3	買い物、遊びに行く。		反抗期あり。 学校では話しても、家では話さない。 「家でも楽しそうにしてよ」と母親にいわれた。	ただうるさい存在。 自分のことを嫌いなんだ一自分のためだというのを認識したとき、今まで親に対して抱いてきた気持ちが間違っていたと気づく。	妹。
2-4	親から禁止されていた、自転車で外出。	とても楽しかった。 悪いことをしているという気持ちも、好奇心旺盛のため。	反抗期あり。 親の考えていたことを想像するのは難しい。 おそらく反抗期だから仕方がないと思われていた。	うっとうしい。 小学校低学年位から親に言われたことでイライラ。 次第にイライラしても怒ったり反発しなくなった。うっとうしいという気持ちもなくなる。	
2-5	町外へ仲の良い友達と四人で。	妙な仲間意識があった。	反抗期あり。 へりくつばかり言う子。 親に言い返したり、情緒不安定な日々。	なんで大人は偉いの？ 部活や勉強のことを言われたので、言われたいくないから、言われたいように行動。 嫌いと思ったことはなく、むしろ尊敬し、大好きだった。	妹。 あれこれ口出しする面倒くさい姉。

<p>⑧兄弟をどう見た 自分の好きなことをして、うらやましかった。言いたいことをいい、細かいことを気にしない。母も自分より姉と話す方が楽しそう。</p>	<p>⑦友人から見て自分は 優等生、学級委員や生徒会役員をやっていた。</p>	<p>⑨友人をどう見た 部活の仲間以外には、一歩引いて冷めた感じで見ていた。</p>	<p>⑩思春期の悩み 高校のときの成績、部活の厳しさ、両親から認められていないこと、体調を崩して、入院したときがきっかけ。自分の性格が裏目に出て、損ばかりしてきた。親や周りの人に自分の性格や行動のせいで迷惑をかけたことに気づき、申し訳なく思ひ、辛かった。</p>	<p>⑪どう乗り越えたか 自己啓発本、文句ばかり言って、失敗を恐れていた自分に気づく。親に認めてもらいたいと思う前に、自分を認めることができていなかった。自分を良く知ることにつながった。 バイトの店長との出会い。失敗を恐れず、言い訳せず、挑戦する姿勢を示してくれた。 完璧主義だったが、「しょうがない」とことと、諦めることの違いがわかり、くよくよしなくなった。</p>
<p>姉とよく比べられたので、「自分だめなんだ」と思うことが多かった。姉がうらやましく、やきもちもやいた。姉が受験のとき、周りからのプレッシャーに応じて頑張っているのを見て、姉を誇りに思うようになった。</p>	<p>優しくよい子。一方で、誰とでも仲良くしようとしていたので、調子のいい子とも思われていた。</p>	<p>悩みをきいてくれ、居場所を与えてくれる。 高校でできた友達は、悪いところも受け入れアドバイスくれた一親友になった。一緒にいるだけで落ち着き、楽しく、幸せを感じた。</p>	<p>進路のこと。親の望んでいる大学に行きたくなかった。母に日記や携帯を勝手に見られて叱られ、送け場がなかった。</p>	<p>学校に話を聞いてくれる人物がいた。特別何かがあったわけではないが、ずきりした。</p>
<p>まだ子ども。</p>	<p>癒し系な感じだけど、冷静だね、と言われた。</p>	<p>たとえ友達になっても、その子の性格の裏まで読んで接していた。</p>	<p>悪口の標的にされたうえ、仲の良かった友人まで、その仲間に入ってしまった。それから人を観察するようになった。</p>	<p>全力で愚痴を聞いてくれた友人の存在。</p>
<p>自分は親のいいところを受け継ぎ弟は悪いところを受け取ったと両親から言われていた一弟を見下す。よくできる自分とだけ敵しい親一弟を憎む。</p>	<p>学級委員や生徒会役員。まじめな優等生。実際には学力が低くて、友だちから意外だと言われて辛かった。何でもだいたいできだし、八方美人なので、裏でこそこそ言われた。</p>	<p>中学は上辺だけの付き合い。明るいグループに入り無理無理会合させた。嫌われたくない。周りの人を自分のために利用した。高校では上辺だけではなくなった。</p>	<p>中学では仲の良い子に悪口を言われた。高校では同じグループ内で一人ずつ仲間はずれ。</p>	<p>中学では直接話し合い、その時は解決しようだったが、結局また悪口を言われた。高校では、自分の意志を曲げずに自分の味方になってくれた友人がいた一今でも大切な人。</p>
<p>親に反抗せず、不思議うらやましい。</p>	<p>なぜそんなに親に反抗しているのか。</p>	<p>親と仲の良い友人が不思議うらやましい。反抗できる自分は大人、反抗できない友人は子ども。</p>	<p>親が自分の反抗に悩んでいるのを見て、辛くなる。親と普通に通ずるにはどうしたらいいのかわからず悩む。</p>	<p>親に敵しくされたので他人や親に甘えられないと想っていた。大人と対抗できるのが大人。それでも親や大人に助けてもらう。自分一人では生きて行けない。頼ったり甘えてよいのだ。親への反抗心が薄れる。</p>
<p>うさぎ存在一尊敬できなかつた。今では社会人で尊敬。大人っぽい</p>	<p>わんぱくでバカなやつ。</p>	<p>大切な友人一相談に乗ってあげたい。自分をさげすめる。</p>	<p>勉強、恋愛、友人関係、将来のこと。</p>	<p>何事もあきらめず。自分ですべて抱え込まず、友だちと遊んでリラックス。</p>
<p>家族で話すのは妹だけ楽しい。ポジティブな性格の妹をうらやましい。</p>	<p>友人に悩みを打ち明けないので、仲の良い家族と思われていた。</p>	<p>両親と喧嘩をしている友人一大変そう。口をきかなければ良いのに自分の考えを両親にぶつけ立ち向かっていた友人より、自分は卑怯だった。</p>	<p>何に対してもイライラ。自分の考えがまとまらず、でも相手には対立してしまう自分が嫌い。周りの人が全部敵に見える。心の中は真っ暗。自分の悩みを自分も理解できないので相談もできなかった。</p>	<p>祖父母のおかげで葛藤から抜け出す。両親も自分と同じような思春期があり、祖父母も困っていたと聞き、安心。完璧な両親の前では、良い子でなければならなくていい。祖父母との話から親を理解できるように。この時期悩んだからこそ、今を楽しんで過ごせる。</p>
<p>妹とともに成長して行きたくない。</p>	<p>頼まれると断れない性格。頼んだらやってくれるだろう。</p>	<p>仲の良い子には壁もなく話せる。苦手な子は避ける。</p>	<p>自分の一言で友人関係が壊れる経験をした。言葉は凶器になる。無視されるようになり学校生活が嫌に。人と関わる時は顔色をうかがい、自分のことは話さない、自分を守るように。</p>	<p>家では辛い気持ちを察して優しくされる。居心地がよい。家族の存在の大きさを改めて知る。自分の味方。</p>
<p>わがまま。中学の頃は八方美人。マイナス思考なので面倒だと思ふ友人もいただろう。</p>	<p>幼い、面倒。自分が友人に対して思っていたことを友人も自分に対して思っていただろう。</p>	<p>中学では部活で人間関係の悩み一部活の上下関係。誰にも嫌われたくない。</p>	<p>自分は何でこんなに頑張っているんだろう。友人に対してなんでこんなに気を使って生活しなければならいんだろう。なんで親の期待や言うことに応えなきゃいけないんだろう。</p>	<p>頼れる人にはとことん頼った。先輩に話を聞いてもらっていた。先輩からのアドバイスを使って乗り越えた。</p>
<p>うっとうしく感じていた。近寄らないでと拒否。今ではかわいい妹。</p>	<p>言っていることがハチャメチャな子。よく、頼りになるとかしっかりとっていると言われていたが、自分ではそう思っていなかった。</p>	<p>一人になるのが嫌。友だちから反感を買わないように生活。親友と呼ぶ子にはいろいろ話したし、感情もすべり出た。</p>	<p>自分は何でこんなに頑張っているんだろう。友人に対してなんでこんなに気を使って生活しなければならいんだろう。なんで親の期待や言うことに応えなきゃいけないんだろう。</p>	<p>勉強一あきらめは必要だなと考えたのがきっかけ。友人関係一遠くより、深く狭くの方が自分らしく思ったのがきっかけ。親一期待に応えれば大して辛くないということがわかってからは良い子でいるようにしている。</p>

学年-番号	①冒険	②その時の様子	③親から見て自分は	④親をどう見ていた	⑤兄弟から見て自分は
2-6	行ってはいけないと言われた川や森に、友達と。	恐怖心よりドキドキ、ワクワク。	反抗期あり。自分では記憶にないが、母に言われた。憎たらしい子ども。	しつこい。同じことで何度も起こる。	弟。怖い。よく喧嘩をした。
2-7	学校を休んで、理由もなく自転車でスタジアムまで。	時間と体力を浪費しただけだったが、走っているときは幸せだった。今思うと、自由に飢えていたのでは。	反抗期あり。親は「どこに出しても恥ずかしくない人間に育てる」という方針。	世間体が最も大切に感じられた。母は一応好きだったが、父は非常に厳しくて嫌いだ。	妹。好き勝手していたので、ちゃんとした人間としてみられてなかったと思う。
2-8	友人らと隣のショッピングモールへ	途中で迷子になり、友人が泣き出し、親に迎えにきてもらった。子どもだけで不安な気持ちと、もう中学生なのだからと大丈夫という気持ち。	反抗期あり。グレしている。将来そんな経験が役に立つと親は考えていたよう。	コミュニケーションが少なく、自分に関心がないのでは、と思っていた。	姉、弟。甘やかされている。自分勝手。
2-9	一人で自転車で海に。	なんとも表現しがたい気持ちになった。何か大切なものがあった。	反抗期あり。その後はいい子。	親は反面教師。親に期待をしなくなってから、反抗しなくなった。	
2-10			反抗期あり。自分のことを話してくれない、心配な子。内気、自立つのがきらい。	母親はうるさい。いちいち口出されるのがいや。干渉されたくない。心配なのはわかるが。現在は、進学させてくれた親に感謝。	
2-11	小6のとき、友人とバスに乗ってプールに。	はじめて子どもだけでバスに乗って不安になったが、自由な気持ちも味わった。	反抗期なし。手のかからない子。親の言うことをよくきいた。	少しうるさいけど、一生懸命働いてくれたので、偉いと思っていた。	妹。よく面倒みてくれる。
2-12			反抗期あり。自分の考えを親に言っていたので、自分のことをわかっていてと思う。	尊敬する部分もあったが、こういう大人にはなりたくない。言っていることは矛盾しているし、知ったかぶり。他の親と比べて、「他の子はもっと親にしているのに」。反面、父の仕事に対する熱心さを尊敬し、母親の子どもに対する愛情をとても感じていた。	姉。年が離れていたのだから、自分のことをよく見て心配してくれていた。
2-13	高校のときは他県まで行ったが、きちんと計画を立て、冒険という感じではなかった。		反抗期あり。何度も同じことで怒られる学習能力のない子。仕事や父親の愚痴や相談ができる子。父はただ甘いので、自分をどう考えているのかわからない。	父も母もうつとうい存在。きいて欲しくないことをしつこくきいてくる。父親のだからしない姿にも腹が立った。冷たく接していた。	
2-14	小学校の頃、友人と自転車で行くところまで行った。	とても興奮した。すごく遠くに行くと感じていたが、実際には学区から少し離れたところだった。	反抗期あり。大きな反抗はしなかったが、かなり扱いにくい存在。母は「頭ごなしに叱りつけたらすると、きつとあなたはもっとひどく反抗してきそうだから、あくまで対等な立場で注意すべきことはしたんだよ。」と言っている。大切にしてくれていたと思う。	煩わしい存在。親の言うことを聞くと、親の決めた通りに生きているような気がして、親の言うことと反対のことをしていた。	
2-15	バスを乗り間違えて、高速バスに乗ってしまい、弟と遠くまでいってしまった。		反抗期あり。進路を決めるときに親の反対にあった。	仲は良かった。尊敬している。	弟。うらやましがられていた。
2-16	子どもだけで泊まる場所があった。	特に寂しいとか怖いという感情はなかった。	反抗期なし。手のかからない良い子。時々何を考えているかわからない。	小学校のときは、親は自分にとっての世界そのもの。親の顔色をよく窺っていた。高校になると親も一人の人間と思うようになった。	妹。しっかりしている自分を見て、落ち込んでいた。

<p>⑥兄弟をどう見た 弟をよくはみていなかった。 親が弟だけに優しくみえた。</p>	<p>⑦友人から見て自分は 相談できない。</p>	<p>⑧友人をどう見た 友達とは仲がよかったが、相談 はしなかった。</p>	<p>⑨思春期の悩み 遊びたいのに楽器の練習が辛かっ た。</p>	<p>⑩どう乗り越えたか 自分のやりたいことだからと、計画を立て て実施し、乗り越えてきた。</p>
<p>かわいがっていた。自分が 我慢をして、しっかりしなけ ればと思っていた。</p>	<p>愛想を尽かされていた。</p>	<p>学校で同級生と話せるのは嫌 しかった。</p>	<p>父親への反感。子ども故の非力さ、 虚無感。中学のとき、何をしても満 たされなく感じた。</p>	<p>父親に対して不満が一気に爆発。親と の間の何かに区切りをつけた。 自分の好きなことをやり始めたため 虚無感が薄れた。</p>
<p>姉のことをうらやましく思う。 いつも正しいことを言い、元 気な弟を見てイライラした。 優しいと感じることも。</p>	<p>明るくて元気。</p>	<p>外見を「いじって」くる友達をよく 思わなかった。中2から仲間意 識が強くなり、「いじって」きた友 達も自分を助けてくれた。進学 で悩んでいたときも、友達の一 言で救われた。</p>	<p>友達と楽しい時間を過ごすことで親 を裏切った気持ちになった。自分 は勉強もせず、遊んでばかりいたが、 親は何も言わなかった。そのことが 辛かったし申し訳なかった。</p>	<p>親の育ち方を祖母から聞いたこと。祖母 は、父親も自分と同じような育ち方だっ たが、中学時代の悪友のおかげで、今 は立派に子どもを育てている。今を 楽しく生きなさいと言った。</p>
<p>よく言えば真面目、悪く言 えば頑固で口が悪い。 相談しやすい。</p>	<p>一緒にバカをやったり、笑つたり、 泣いたりできる存在。お互い 切磋琢磨しあひながら育つて きた。親とは違う視点から、自 分を見てくれる。</p>	<p>父から「お前には本当の友達なん かできない」と言われ、失望と悲し み。親の前から消えたい。</p>	<p>グループの中から一人一人順番に 無視されるいじめを体験。何の理由 もない。「あの頃の私たちは、中 生ながらその場の空気を必死に読 んで、日々いろいろなこと闘つて いたのだと思う。」</p>	<p>親とのことを、考えないよう一歩下が るところからものを見るようになった。親の ことに無関心にな。そうすることで自分 を守った。あのとき違う考え方ができたら、 今は違う関わりになっていたらかもし れないが、自分にとっては解決している と感じる。</p>
<p>親が働いていたので自分が 面倒を見なければ。かわい いと思っていた。親にかわい がられる妹を時々うらやま しく思った。</p>	<p>人見知りで大入しい。つま らない人と思われていたか も。</p>	<p>いつも一緒にいてくれる、あり がたい人。途中でいろいろあつ たが。</p>	<p>思春期の頃、ちよつとしたことで苛 つっていた。</p>	<p>苛ついたときでも親にあたるわけには いかなかったので、一人でふとんにくるまって 寝ていた。</p>
<p>自分は優柔不断なので、姉 の決断力や行動力をすごい と憧思っていた。姉を見て、 人生そんなに甘くないと感 じることもあった。親からの プレッシャーは自分の方が強 いと感じていたので、姉は気 楽でいいなと思った。</p>	<p>はりきっている子。要領の いい子。</p>	<p>青春を一緒におくっている仲 間。友情を熱く感じた。居心地 がよく、とても大切な存在。</p>	<p>学校、部活、レッスンの両立。</p>	<p>とにかく頑張りごとと、要領よく無駄がな いようにすることを心がけた。同じような 境遇の友達との存在。</p>
<p>リーダーシップはあるが、 自己中心的。よき相談相 手。反面、出かけるのが嫌 いなので、ノリの悪い面倒 な存在。</p>	<p>一人っ子なので。友人はとて も大切。友人の一言に傷つくこ ともあったが、その一言に目が覚 めたり、自分の悪いところに氣 づいたりした。悩んでいるとき は友人と話すだけで気が晴れ た。</p>	<p>友人にひどいことを言ってしまうと、 後から悩むことがよくある。親に叱 られたときも自分はどうしてこんな にだめな人間なんだろうと思う。</p>	<p>これら悩みをいまだに乗り越えられて いない。ただ、友人の存在には励まされ ている。学校の授業やテレビ、雑誌、歌 詞などの素敵な言葉に勇気づけられて 救われていると思う。</p>	
<p>明るい。八方美人。親や先 生とうまくいかなかった分、 友達との結束は強かった。 何でも友達と話して相談し て一緒に支えあっていた存 在。</p>	<p>家族よりも信頼でき、安心でき る存在。思春期の頃の大きな 支え。</p>	<p>何に対してもイライラしてしまう自分 の気持ちに悩んだ。 急に孤独感を感じることも。</p>	<p>詩集や本を読んだ。思春期に出会った 詩集に涙が自然にあふれ、読み終わつ たとき心が軽くなったと感じた。どの作品 にもその瞬間に自分に響く言葉があつ て、それが支えとなった。</p>	
<p>うらやましかった。</p>	<p>頼られていた。</p>	<p>行動力のある友人に憧れ。自 分が楽器を始めるきっかけを 与えてくれて、感謝している。</p>	<p>祖父母がなくなったこと。進路。</p>	<p>母がショックを受けていたので、自分が しっかりなくてはと思った。</p>
<p>進路も決められない意志薄 弱なやつ。 のちに、それぞれのペース があると思うように。</p>	<p>相談しやすい。</p>	<p>高校のとき、心底、心をゆるせ る友人と出会う。</p>	<p>小学校の頃に心に傷。それ以来、 悩むことが多くなった。</p>	<p>病院に通う。今も通っているが、今より もつとよくなると思つて頑張る。</p>

学年-番号	①冒険	②その時の様子	③親から見て自分は	④親をどう見ていた	⑤兄弟から見て自分は
2-17	中学のとき、友達と東京へ。	不安もあったが、ワクワク、少し大人になった気分。	反抗期あり。心配したのでは。	うっとうしい。ちょっとしたことですぐ喧嘩。しかし母は辛いときは気づいてくれて、話を聞いてくれたので、頼りにしていた。一番の理解者。ありがたみを感じる。	怒りっぽい。
2-18	自転車で友人とあてもなく走り回った。	達成感。自信。大人になった気分。	反抗期あり。素っ気ない態度。何を考えているのかわからない、面倒くさい存在。態度の悪さによく怒られた。	親の存在は怖かった。言い返すことはできず、心に秘めていた思いがたくさんあった。高校から自分を応援してくれている親に感謝の気持ちが出てきた。	妹。頼れる存在。
1-1	友人と海へ。		反抗期あり。扱いづらい存在。反発。口をきかない。	友人の親と比べて、自分の親に不満。兄弟との扱いの差をひどく感じていた。	短気。親にあたる。
1-2	学校の裏山を友人らと探検。	このまま知らない場所に行つて、違う人生を歩むのだと友達と話した。	反抗期あり。良い子のときと屁理屈を言つてあげ足を取るときも。	親は気分で叱る。勝手。	
1-3	自転車で知らないところを走るのが好きだった。	別世界に入った感じ。新しい発見、関心。成長した感じがした。	(反抗期の記述なし。) 無邪気。好奇心旺盛。	親は特に何も言わない。	妹。 (妹からどうみられているかは記述なし)
1-4	知らない土地に對するあこがれ。自転車で行くだけでも走る。	帰り道が分からなくなつたとき、大人に助けてもらつて一人で何でもできる気になつていった頃だったが、自分の非力さと人のありがたみを感じる良い機会だった。	明確な反抗期はなかった。生意気で扱いづらい子。へりくつをこねて困らせる。友だちもいない社交性の薄い自分を心配していたらう。	理不尽で怒りっぽく、自分のことを理解してくれない。親に育ててもらっている状態が嫌で早く自立したいと考える。反面、絶対的な価値基準はおやにあつた一親の言つたことは世間一般の基準だと考える。	兄と姉 生意気で理解しがたい。友人がいけないことをよくからかわれた。
1-5	高校のとき初めて友人と東京へ。	興奮で前日の夜は眠れなかった。当日は母からのメールに安心した気持ちになつた。	反抗期あり。中学進学後、なじむことができず、親にあつた。心配していた。	親の話すことにはいちいち反抗した。父とはほとんど口をきかなかった。暴言を吐いたり、物にあたったり、迷惑をかけた。	弟。 バカにされていた。よく喧嘩をした。

<p>⑥兄弟をどう見た イラッたせられることが多かったので、嫌でしょうがなかった。</p>	<p>⑦友人から見て自分は 信頼されていた。</p>	<p>⑧友人をどう見た 信頼していた。素でいられる友達が好きだった。嬉しいこと、悲しいことを共有し、励ましあった、かけがえのない存在。今も続いている。</p>	<p>⑨思春期の悩み 中学の頃、はばにされたり、悪口を言われた。仲直りするのに時間がかかり、辛かった。勉強では努力が裏らなかった。</p>	<p>⑩どう乗り越えたか 友人関係の悩みは家族が支えに、勉強のことは友人が助けてくれた。一緒に勉強したり、わからないところを教えてもらったり。地道に頑張ることを教えてもらった。</p>
<p>妹に対して対抗心を持っていたときもあった。高校くらいから相談しあったり、励ましあったり。</p>	<p>自分に自信がなくてはきりしない自分に、イライラしていたのでは。</p>	<p>嬉しいことや辛いことを共有でき、時にはぶつかることもあったが、本気で話し合っただけで仲が深まった。尊敬できる存在。</p>	<p>小学校のとき、いじめられていたこと。</p>	<p>家族も友人もかけがえのない存在。両親が支えに。教員には自分にも悪いところがあると言われて、何の解決にもならなかった。中学になってからは良い友達ができ、支えられた。周りの人に支えられて、多くのことを乗り越えてこられた。これから恩返しをしたい。</p>
<p>自分より我慢強く、親から信頼されていた。うらやましかった。嫌いにはならず、むしろ尊敬していた。</p>	<p>いたって普通。</p>	<p>たくましい。気さくで自然体でリラックスした振る舞いがキラキラして見えた。</p>	<p>進路選択のとき、思春期の感情が邪魔をして、親と話せなかった。嫌な気分が続き、辛かった。親に対する態度を変えたかったが、解決策が見つからず、悩んでいた。</p>	<p>自分の振る舞いがわかるようになって、親との会話が増えた。買い物や外出にも積極的にいった。会話の幅も広がった。兄弟や友人からもアドバイスや助け舟を出してもらった。自分も歩み寄らなければと。歩み寄り、親は応えてくれた。</p>
<p>冷めててノリが悪くて扱いにくい存在。親友は理解してくれていた。</p>	<p>誰とでも仲良くできて、うらやましい。誇って見えた。</p>	<p>自分の存在価値について悩んだ。保健室で過ごすことも多かった。今では、悪い方に考えることが減った。少しずつだが前進している。</p>	<p>担任の先生のサポート。その先生のおかげで今がある。とても感謝している。で、大学生活を頑張っていることを伝えたい。</p>	<p>担任の先生のサポート。その先生のおかげで今がある。とても感謝している。で、大学生活を頑張っていることを伝えたい。</p>
<p>見本を見せなければ、と思ったが、失敗ばかり。兄としてのプライド。</p>	<p>気の合う友達。自分は話を合わせるのが得意なので。</p>	<p>気の合う友達。</p>	<p>親の仕事で、転校が多かった。いじめにあったり、成績がたびたび下した。</p>	<p>先生に相談した。</p>
<p>一人で遊ぶことが多かった。人とのつき合い方がわからない。友人の多い姉に憧れ。模範的な行動しかできない自分から見て、姉の自由な行動力がうらやましかった。</p>	<p>友人から見て、自分は唯一無二の存在ではなかった。</p>	<p>中学の友人は、自分とは価値観、好み、考え方が全く違った。新鮮でもあり、理解しがたいものでもあった。世の中には様々な考え方や嗜好があると教えてくれた。</p>	<p>クラスメートからの陰口。普段から普通に会話していたクラスメートが実は自分のことを嫌っていた。</p>	<p>すべての人から好かれる人はいないと考えるように。正しいことだけしているつもりでも、違う方向から見れば、間違いになり得る。</p>
<p>力の強い弟に対して、悔しさと怒りが込み上げた。</p>	<p>嫌な思いをしても、怒らずに友達と接した。何を言っても怒らないので、優しい子と見られていたのでは。思ったことを何も言わないので、信用されていなかったかもしれない。友達も少なかった。</p>	<p>友達に嫌われないように、友達の顔をいつも気にしていた。一人になるのが恐くて、学校では言いたくも言えず、友達とは上辺だけの付き合いだった。</p>	<p>内気で人見知りだったので、友達になかなかできなかった。ストレスを家で発散していた。自分らしさを失い、つい人の目を気にしたりしていた。学校でも家でも毎日不安だった。</p>	<p>犬を飼ったことがきっかけで、家族と過ごす時間が増えた。犬と過ごすことで心が安らいだ。友達関係は学年が上がるにつれ、自分も前に進まなければと意識が高くなった。今ではたかさんの友達に恵まれた。思春期は、家族のおかげで乗り越えられた。家族を大切にしたい。</p>

## 8. 結語

本論では、現代の若者の生の姿を描くことを目的に、思春期の葛藤をテーマにした映画を鑑賞させた上で書かせた学生の回想文を分析した。学生の感想の中には、映画を見ることで、あの頃の自分を思い出すことができたと書いてあるものが多くあり、また、学生の回想文が非常に豊かであったことを振り返ると、この手法には効果があったと考えられる。

学生らの回想文を見ると、親、兄弟、友人と思春期の自分との関係を真摯に見つめた上で、思春期の葛藤を乗り越えたサバイバーとしての自分が語られていた。そこには、過去の自分を客観視し、今現在の自分と結びつけることで、当時の体験を肯定的に意味付ける若者像が描き出されていた。言い換えれば、思春期の暗い時代をポジティブに捉え、だからこそ、今を楽しく生きられると解釈している学生が多くみられたのである。これについては、もちろん、現在の大学生活が楽しいということが、前提条件かもしれない。例えば、2-2は「大学は今までの人生の中で一番楽しい。朝、『おはよう』と声をかけてもらえる幸せ、『みんな』の中に自分も含まれている幸せは、中学の頃の辛い経験があったからこそ感じられると思う」と述べている。今回、回想文を書いた学生は教職科目を履修している学生で、おそらく一般の学生より目的意識があり、現在、強い不適応を感じていない学生であると仮定できよう。これについては今後、検討していく必要がある。

いずれにしても、今回の回想文の全体を通して、多くの学生が、家族や友人に支えられて、困難を乗り越えてきたことを実感していることが伝わってくる。そこには、周りの人々への感謝がいくつも綴られていた。時代や環境の変化は激しく、若者を取り巻く事情は確かに変化してきていると考えられるが、それでも周りの人たちに支えられて葛藤を乗り越える姿は、いつの時代も変わらない。

では、何が変わっているのか。それは、この回想文からだけでは、推測することが難しいが、むしろかつての若者世代よりも早い段階で、親に対する葛藤が消失し、世代間のギャップが埋まってしまうことではなからうか。もしくはギャップそのものが存在しないのかもしれない。つまり現代の若者は、親の愛情をひしひしと感じる中で、親との価値観の違いを突き詰めることなく、したがって、確固たる自分の価値観を形成する機会もなく、大人になってしまっているのではないだろうか。これに関しては、3.(2)の「通過儀礼」の変質、あるいは消失と、5.(1)の消費文化世界の到来の関係から考察してみたい。

伝統社会における通過儀礼はその社会の基礎を成す一つの価値観から生み出され成立していた。そこで若者たちは、何の迷いもなく親の価値観を受け継ぎ、そしてそれを次世代に受け渡していくことが彼らにとって最も重要なことであった。一方、その次の世代、産業化の進んだ近代を生きる親の世代は、親との対立の中で、親の価値観を否定することによって自らの価値観を築き、それを礎にして生きてきた。親とは異なる自分の価値観を築き上げることこそが、この世代の「通過儀礼」として考えられるのではないだろうか。この「通過儀礼」を「通過する」ことによって得られたのは、非常に自由な生き方であっ

た。自由であるためには、お互いの価値観を許容し、尊重する必要があったと考えられる。そして現代、消費文化社会の到来によって、価値観は多様化の一途をたどることになった。親の価値観のみでなく、ありとあらゆる価値観にさらされる若者たちは、自らの力で、その雑多な中から自分の価値観を選びとらなければならないのだ。選択肢は無限にある。しかし、選びとることの困難さは選択肢の多さのせいばかりではない。近代の親世代は、絶対的価値観を持つ親と強く衝突することによって、対立点が明確であったが、他者の価値観を尊重することを旨とする近代の親は、自由に生きる子どもたちに非常に寛容であるので、親子の間に生まれる対立は小さい。対立は小さければ小さいほど、子どもは何の疑問もなく親の価値観を受け入れるか、もしくは何が正しいのか全くわからず、いつまでもアイデンティティが定まらぬまま、生きることになるのではないだろうか。そのように考えると、現代では、消費文化世界に上手に適応し、その時々に応じていろいろな価値観を選びとっていく能力を身につけることこそが、あたかも思春期における通過儀礼のようでもある。「通過儀礼」は消失したわけではなく、明確な一つだけの基準をもたない、曖昧模糊としたものに変質したと考えられる。そして、価値観を選びとる能力を育むには、長期にわたる学校教育が必要となろう。

現代の若者の親への依存の長期化は、こうしたことも原因の一つになっていると推測される。しかし、価値観を選びとる能力は教育によって身につくとしても、価値観を作る必要性がないところでは、これも機能しない。価値観を最も必要とするときは、おそらく子どもが自立を迫られたときであろう。そのように考えると、物わがりのよすぎる親は結局のところ、子どもの自立にとっては障壁なのかもしれない。逆を言えば、自分の価値観を強行に押し付けてくる親の煩わしさこそ、子どもが巣立つためには重要な要素となるのではなかろうか。居心地のよい関係は、いつまでも子どもを親の元に引き止める要因となる。青年期の子どもがいる家庭には、適度な「いらだち」が必要なかもしれない。

## 文献

- 大平健. 1995. やさしさの精神病理. 岩波書店.
- 岡田努. 1992. 友人とかかわる. 松井豊(編). 対人心理学の最前線. サイエンス社. 22-26.
- 尾木直樹. 2006. 思春期の危機をどう見るか. 岩波書店.
- 土井隆義. 2004. 「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える. 岩波書店.
- 土井隆義. 2008. 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル. ちくま新書.
- 中西新太郎. 2001. 思春期の危機を生きる子どもたち. はるか書房.
- 平石賢二. 2006. よくわかる青年心理学. 白石利明編. ミネルヴァ書房.
- 深谷昌志. 2004. 中学生にとっての家族—依存と自立の間で. モノグラフ・中学生の世界 vol.77. ベネッセ 未来教育センター.
- 本田和子. 1995. 映像の子どもたち. 人文書院.

- 宮下一博. 1995. 青年期の同世代関係. 落合良行・楠見孝(編). 講座 生涯発達心理学 4「自己への問い直し: 青年期」. 金子書房. 155-184.
- 宮本みち子・岩上真珠・山田昌弘. 1997. 未婚化社会の親子関係—お金と愛情にみるかぞくのゆくえ. 有斐閣.